

(本藩) ()]

[(本藩)

1858 6 28

潜の撰。 黒竜江 露満国境の黒江。 一昨日 藩主の御国入りと共に恒例の人事異動があり、益田(国相)と浦(行相)が入れ代わり、坪井派の勢力が後退し、周布等の一派が実権を掌握するに至った。

内藤万里助 名は亮、号は瘦竹。当職用談役等に任じ明治八年没。この年右筆から当役手元役に転じた。 前田孫右衛門 一六二頁注 御在国 藩主が国元に居ること。 差除 更迭。

議論 正論。正しい議論。 中谷 中谷正亮。この年三月九州、六月京都、九月江戸に往き、翌年二月帰国。 晴天積り 心中を包みかくさず申した積り。

洋言 勝海舟訳の西洋新聞を松陰が重訳したもの。英仏露米が中国を侵略、その軍船がやがて日本に來航するという記事でオランダの士官ヘントローエンの文(戊午幽室文稿)収録)。 大衆 通称源太郎。名は奥年、字は弘毅、号は西山。長州藩寄組尾玉若狭の家臣。吉松淳蔵・僧月性らに学ぶ。松陰直

書 簡 安政五年

ては迎も説貫き六ヶ敷可^レ有^レ之と考、又論じ通に仕候。併是は今にて思へば甚勿体なき考なりし。早速中谷迄申遣すべく候。中谷は京邸を根拠とし伊勢・越前へ跋涉の積りなり。用事あらば書翰京邸まで御出し可^レ然候(中谷と二兄と氣脈の絶ぬ様にせねばなにも台柄拍子となるぞ。竹島、為^レ夷夷、こと甚難^レ信候。興膳、近日も福原まで申來候。北国船毎々往返其前後を通船致候へ共為^レ何事も無^レ之様子、又嘆夷既に抛^レとも不^レ苦、矢張開墾を名とし交易をなし、因て外夷の風説を聞くこと尤も妙。嘆夷既に抛^レれば別て難^レ差捨^レ候。無^レ左候てはいつ何時^レ長門などへ來襲も不^レ可^レ測也。寸板不^レ能^レ下^レ海の陋を破るには是等にしく妙策は無^レ之候。黒竜・蝦夷は本藩よりは迂遠、夫よりは竹島・朝鮮・北京辺の事こそ本藩の急に相見候。

*吉松論は先書にも申上候。先夫なりに可^レ被^レ成置^レ候。文虎何とぞ西遊させ度ものなり。是までは昨夜の書なり。是よりは今夜(廿八日)の書なり。今日口羽來訪、折柄高杉落合、有隣・清太談論、口羽も此節少々不快(胸痛の氣味にて此節至極悠々閑雅、氣保養の積り、夫に付今日不^レ図詩話などにて終^レ日(濱狂詩など論候、近來の好き祭り仕候(在吉巻。就中憂國の談も一二有^レ之候。 ○塩屋文、「論^三澳門^一、居夷^二」以下五六篇皆妙、実に海内の文宗と覚候。塩屋の上梓本に日本海航記と申もの有^レ之、是は彼理等広東にて日本來航の事を議たる書の由、御せんさく一二本御購贈可^レ被^レ下候。

*采太帰國の事、僕聞^レ之実如^レ躍喜悅仕候。実甫・松洞の力居多と奉^レ謝候。洋言の説果^レ信ならば、実に三年は置、半年も空しく居らるゝ時勢に無^レ御座^二候。

六月廿八日

松陰寅白

実甫 足下

二三五